

時の原始的樣態に就て(承前)

務 臺 理 作

六

前回では原始的時間意識の樣態を表象作用の樣態と見るプランタノの考へに疑問を起し、表象に時の樣態の表はれるためには特に表象が一次の意識として直接志向的對象へ關係することが重要な意味を持つこと、此關係の仕方は單に志向的對象を意識すると云ふよりも、特に對象に屬する質料的なるものに於ての對象的關係に基づくこと、從てマルチーの表象質料の如きものと關係することを明かにして見ようとしたのであつた。判斷や情意の本質的特色を定むると同一の見地より見た表象の特性は何處までも對象を表象的に志向すると云ふ點にあつて、時の樣態を必然的に持つことを豫想しない。是に由つて前回の一に示した二つの志向的關係、即ち作用の持つ志向關係と時の變様の成立する關係とは決して同一のものとは見られぬ點を明かにしようとしたのであつた。作用の志向性に於て時の變様は成立せず、

その双關する對象の志向性を俟つてはじめて成立することは、作用の性質の側のみから考へようとする布伦タノよりも、進んで作用的なものと對象的なものとを双關々係の許に仔細に分析せんとするフツサールに於て解明されるものがある様に思はれる。フツサールでは時の意識は如何に考へられるか、以下その思想を少しく辿つて見よう。

フツサールは布伦タノの思想に従つて意識の本質を對象への志向性に求める、吾々の如何なる意識も志向的體驗であり、志向すると云へば必ず何ものかの意識を含み、何ものかを意識すると云へば其一端に必ず「我意識す」の意味を伴ふ。さり乍ら意識が現實的に生々と對象に向けられ對象の超越的定立に没入する間は、*cogito* は純粹我の立場から反省せられない。然し超越的定立の完成 (*Volzung*) に努力する現實的の意識も先驗的の立場より見れば自己の志向的對象を志向する *cogito* 一般として反省されねばならぬ。それが意識の意識たる本領に還元することである。即ち布伦タノの云つた様に如何なる意識に於ても對象を志向する第一の意識に對し此意識を更に意識する内部知覺が伴はねばならぬ。意識の一面は常に或る對象を志向し、かく志向することを現實的に體驗するまゝに反省を超越するが、他面は必ず

自らへ反省して自己を隈なく意識し得る明るいものでなければならぬ。無反省的な現實の體驗にも先驗的には作用が作用へ cogitatio が cogitatio へ反省することの可能が屬してゐる。(„Ideen.“ § 28, § 34-35, § 37-38, § 77.)

内部的反省作用とそれに由て反省される cogito とは如何なる關係に立つか。cogito がそれ自身に省みれば純粹我の立場より反省することゝなる故反省の作用は cogito の外より加はるのではない。反省と cogito は我の cogitatio に於て同一であり、二者は本來同一の體驗流に屬し、従つて實有的 (reell) に結合する。此ことを他面から見ると cogito が生々と對象を志向するまゝに、しかも cogito の本領として自らへの方向へ還り、純粹我の反省と結合することに由つてその一端に結附く對象性を内在せしめ、それへの關係に立つ自己の姿を隈なく現象せしめることになる。それで反省の作用と反省されるものとが實有的に結合すると云ふことは、此場合の反省(内部知覺)にとつて最も注意に値する特色であらう(„Ideen.“ § 38)。フッサールは此反省を以て現象學的方法としたすべての現實的體驗に此反省を加へてその中に含まるゝ志向的本質を純粹に内在化し内面的に諦視するが現象學的立場である。現象學的立場に由つてか様に反省された體驗は反省の以前の體驗と如何に異なるか。反省の有無は對

象を志向する *cogitatio* そのものに何等の變更を加へるのではない。明るい意識も暗い意識も我が同一の對象を志向すると云ふ本質と、それに對應する *Bestimmungsgehalt* に何等の變更があるのではない。無反省的と反省的との區別はかゝる本質的關係の持つ一つの變様にすぎない。以前には内向的に暗かつたものが明るくなつて來る迄である。これを對象的側面より見れば對象の意味の顯現に關する特色の相異であつて意味そのものゝ變易ではない。かくの如き變様は體驗の要素が複雑となればなる程多様な色合ひを呈する筈であり、かゝるものゝ一としてしかも特に定立的變様の一として時の原始的變様が見出されるのである (*Ideen*, § 37, § 78, § 132)。

時の變様は云ふ迄もなく「現在のなもの」をフンダメントとしなければならぬ。變様とは對象とそれに對する志向性の同一を維持しつゝその意識に於ける現はれ方、例へばそれが *Idiatis* に現はれるか或は *bidialis* に現はれるか、明暗、生々の度合如何の相異を含むことである。吾々は或る知覺と想起に於て同一の對象を同様に直觀的に表象するのであるが、その内容の現はれ方には相異がある。此場合に吾々は知覺内容の特色をフンダメントとし想起内容の特色をばその變様であると考へることは出來るが、その逆は考へられないから、知覺内容の持つ特色は直前に與へら

れた原始的印象として、そのまゝに現象してゐるものとして、何ものよりも導き出されない無變様のなもの(unmodified)と見られる。それが即ち「現在」の體驗である。すべて時の原始的變様は此無變様のな現在の體驗より出發せねばならない。

かゝる現在の體驗は現實的には必ずしも反省の對象に置かれて居ないけれども先驗的可能として純粹我の反省に結付く時、その變様の方向が判明に現はれ、種々なる時の區別に置かれた過去の體驗もすべて現在の變様を擔ふものとして現在の含める志向性に結合し、此志向性を通じて一定の方向に發展するものと見られる様になる。勿論現在の體驗が例へば外界にある事物を知覺してゐる時、超越的定立を擔へるものと、それに對するレアルな關係とは、そのまゝで反省に内在することは出來ず、従つてそのまゝで内在的時の變様の出發點となることもフンダメントとなることも出來ない。實在的なものは超越的空間性を有し超越的時間に限定されるものと定立されるからである。フッサールはかゝる立場にもものを見ることを自然的態度と云ふのであるが、これを所謂現象學的態度に移して反省する時、知覺對象の超越的定立は中和され、夫れの我に對するレアルな關係も純粹に排去されて、唯知覺と知覺されるもの(Wahrgenommenes als solches)の間の志向關係が残される。勿論此志向

關係にはその時我が現前に知覺した内容の顯現が伴ふのであるが、それ等はすべて内在化されて内部知覺の直接なる對象となる。これに由つて反省としての内部知覺には、其一面のみが顯現し他面は隠れて現はれないと云ふ様な *Absehung* がなく、(*Absehung* を以て現はれると云ふ見方は現はれるものを已に超越的關係に置いて居る)志向關係を擔へる顯現の内容は對象そのまゝの現はれと見られる。かゝる體驗はたとへ如何様に變様されるにしても更に他の *Absehung* を持つことなく、その意味での十全性を變様を通じて維持してゆく。時の變様のフンダメントとなる直觀は十全的直觀であり、時の變様は常にかゝる特色の許に見出されねばならぬ (*Ideen*, § 88-89)。

さて時の意識の出發點は現在の體驗にあるが、其變様の進みゆくべき方向は如何にして定められるか、種々なる過去や未來の異なる位置に散在するものを志向してゐる意識體驗が、如何にして唯一の時の線と云ふものに結合し相互の不可分離的關係を見出し得るのであるか。これを明かにするために再び現在の體驗の如何なる意味を擔へるかを吟味して見よう。現在の志向的體驗は單に現在にあるものとして終るのでなく、過去と未來に對する無限の背景を擔ひつゝ自らまた背景の中へ

發展してゆくものである。過去の體驗を維持する作用を Retention、未來に對する志向性の維持を Protention と呼ぶならば、現在の體驗は對象への志向を維持しながらかゝる作用の支持する領域へ次第に移るのであるが、吾々はまた一方に Retention に於ける想起に由り、他方に Protention に於ける期待に由つて其處から或ものを取り出して意識することが出来る。然し此想起期待の作用も現實の cogito として見れば必ずしも内部反省を伴ふてゐない。そのために單に想起され又は期待されるものは現在の cogito を超越するものとなり現在から獨立乖離したものとなる。此立場に於て過去は現在に還る能はず、未來は現在に及び難いものとなつて三者相互に排除する外はない。然し如何なる cogito にも反省が可能であると云ふ先驗的立場より見れば過去になつたものも嘗て現在に知覺されたもの (das Wahrgenommene-gewesen-sein) となり、未來にあるものもやがて現在に知覺されるもの (das Wahrgenommen-sein-werden) となつて、すべては現在の十全的知覺體驗に結附く様になる。かくて例へば過去を想起すると云へば、反省の立場に於てそれに對應する知覺體驗がその中に意識され、過去はもはや超越的でなく、かつては今にあつたもの (gegenwärtig Gewesen) として「今」の變様となり、同時に想起は現在知覺の變様となる。同様に未來も「今」の變様であり期待

は知覺と本質を同じふするに到るであらう。過去を志向するのは過ぎにし今を志向するのであり、未來を志向するのはやがて來る今を志向するのであり、共に今を志向するものとして同一の志向を維持しながら、其變様として原始的な知覺體驗に結附するのである。過去と未來がか様に現在の變様として見られる時、三者はもはや離れ離れの者でなく、同一の體驗流に屬する不分離的のモメントとなる (Ideen, § 77-78, § 81, § 99)。

以上の如く現在の體驗は反省と結合することに由つて自身の二變様を丁度相反した側に見出す様になる。一は現在に先立つものゝ屬する領野 (Horizont des Vorhin)、他はやがて來るものゝ屬する領野である (Horizont des Nachher)。現在は此變様の云はゞ手がゝりになり出發點になるものとして絶對的に原始的な、生々とした、原始印象を含んで居る。此原始性の意識が特に無變様のなものとして、變様された二者に對する現在體驗の特色となる。先立つものゝ屬する領野は「變様された今」又は「過ぎた今」に由つて連續的に充實される、即ち如何なる「過ぎた今」をとつて見ても必ずそれに先立つものが見出される様に連續的に充實される。これより見れば現在の原始印象は連續の限局面 (Grenzphase) に過ぎない。而して此連續は單に一様なものでは

なくそれを充實する要素は相互に幾重にも結附いてゐる、例へば一つの現在體驗は Retention に入ると共に此 Retention は更に Retention の Retention に入る。吾々は一の記憶の中にまた記憶を持ち、それに於て更なる記憶を持つと考へられるであらう。未來に就いても同様に變様に於ける志向は異なるが充實した連續を見ることが出来る。かくして意識に於ける所與の様態としての種々なる要素が、今とか、先立つとか、後に續くとかの意味を持ちつゝ、しかも同一の志向的本質の變様に對應するものとして充實的連續的に唯一の體驗流に連結する。過去と未來は唯一の體驗流に於ける時の變様の方向に過ぎない。時の方向が非可逆的であると云ふのも、現在の變様として過去を見ることが出来るが、逆に過去の變様として現在を見ることが出来ない。いと云ふ關係に基づくのである。吾々はまた此體驗流がいつ終ると云ふことも考へ得ない、何となればそれは「終る」と云ふことの意識なしに終ることは出来ず、終ると云ふ意識がまたそれを充たす一内容となるからである。如何なる體驗も例外なく示す處の此連續の形式をさしてフッサールは現象學的時間と呼ぶのである。それは單に或る一體験に於ける要素の結合形式であるのみならず體驗と體驗とを結合する持續的統一の必然的形式と見られる。純粹我の立場に於ては體驗の結合自身

も一つの意識であるから現象學的時間意識が直ちに現象學的時間そのものとなるのである (Ideen, § 81-82, § 118.)。

七

フッサールの現象學的時間及其様態を以上の如くに解して、さて上述せる時の變様の含む志向性と、作用一般が對象へ關係する志向性と如何なる關係に立つかと云ふ問題に就き、フッサールの見解を吟味して見よう。

フッサールは論理研究では意識の問題に關して主として其本質的分析を試みた、如何なる意識も志向的體驗であり、對象とは超越的實在定立から離れた志向的意味的對象を意味し、それを志向する作用の本質は作用性質と作用質料よりなる。對象は純粹なる意味に屬し作用の本質はそれを志向するにある。特に此對象を志向し他の對象を志向するのでない事を限定するものは常に作用質料であり、從て質料は作用の對象に向ふ方向を本質的に限定しこれを支持するフンダメントとなる。そのため作用の性質が、例へば同一の對象に就ての直觀的表象が知覺から記憶期待又は想像へと變様變易しても、對象への同一的志向關係を維持するフンダメントと

しての質料は變易しないと考へられる。對象が異なれば勿論質料が變易し、質料が變易すれば對象も異なるが常であるが、時としては質料が變易しても對象の同一の場合もある。然し如何なる場合にも質料が變易しなければ對象は同一であり、従つて對象への基礎的關係は同一である。か様に考へれば質料は意味的關係を一義的に限定するものとして、意味的質料であり、従つて作用の如く實有的であり得ないもの、それ自身としては非實有的なものとならねばならぬ。然しフツサールは質料を作用から離して見ずに具體的には常に作用の一モメントとして作用の本質を構成するものと見、作用自身は體驗せられるものとして實有的であると見る故、當然質料も實有性を帯びなければならぬ。かく質料は體驗に於て實有的であると共に非實有的でなければならぬものとなるのであるが、孰れにしてもフツサールに由れば意識の「本質」を構成するもので、その「變様」を示すものではない。然しながら具體的な意識をとつて見れば同一の本質に就てもその意識される仕方に於ける明暗生々の度、對象の顯現の度の如き無限の相異が含まれねばならない、従つてかゝる特色の相異を表はす要素——特に變様に關する要素と云ふ如きものが考へられねばならない。フツサールはこれを充實 (Fülle) と呼ぶ。例へば同一の志向性に含まるゝ内

容が知覺的に與へられるか記憶的期待的又は想像的に與へられるかの特性を示す要素である (Log. Unters. II. V. § 20-21, § 34, § 37, § 40, II. § 17, § 21, § 25, § 28)。以上意味的對象と志向的本質及それに伴ふ充實の三者は具體的意識の全體を構成すると共に認識的本質に缺くことの出来ない要素と見られるが、*„Ideen“* に於ては特に先驗的還元の立場から純粹我の反省を中心としてこれ等の要素相互の關係を明かにしようとしてゐる。

„Ideen“ に表はれて來るノエシスとノエマの双關々係に就いて見れば、ノエシスとは具體的體驗の作用的側面を示すものであつて、これは論理研究に於ける志向的本質に相當するわけであるが、*„Ideen“* では質料と云ふ言葉を用ひずにノエシスの *Sinngebung* を擔ひゆく處の質料的與件 *hylische Daten* (*Empfindungsdaten*) が考へられてゐる、之は全く質有的で夫れ自身として見れば何の志向性をも持たないものである。之に對しノエマとは云ふ迄もなく作用的側面に双關する對象的側面であつて、作用の志向する意味の層を構成する非質有的な要素であるが、論理研究の志向的對象の見方よりも遙かに精細になつて、具體的意識内容の含む種々なる意味の層、その持つ變樣の特色が含められてゐる。例へば同一の對象を志向すると云ふ作用的志向性は

同一であるにしても、それを知覺し記憶し想像するに應じて對象の側には知覺されるもの (Wahrgenommenes als solches) 記憶されるもの (Erinnertes als solches) 想像されるもの (Phantasiertes als solches) としての意味が現はれ、またその現はれ方に伴ふ種々なる特色が示される。かゝる特色に由つて特色づけられた意味は、然し同一の志向を維持する表象に應ずるものとして更に中核の不變的なる意味對象に結附く。フツサーはノエマに與かる此二要素、意識の仕方に由つて特色附けられた具體的意味の層を對象的意味 noenaischer Sinn、その中核となり維持者となり主體となるものを純粹意味對象 noenaischer Gegenstand schlechtin と云ふ (Ideen, S. 131-132)。後者が論理研究に於ける志向的對象であり、前者は志向的本質に與かる質料に、含まれた對象的志向への支持性が純粹に非實有的な相に於て抽き出されて來たとも考へられるであらう。ノエマは常に此對象的意味 noenaischer Sinn に由つて對象への志向關係を擔つて居る。或る對象が種々なる性質を示す賓辭の主體と見られる時、此賓辭と主體との結びきが此處に云ふ意味と對象との關係となり、またその賓辭になるものが自身の種々なる變様を持つ時、變様の性質に對する一つの核として意味自身が一つの對象になることも考へられるであらう。か様に對象的意味はノエマの實質を構成するもの

と見られるために "Ideen" に於ける意識の分析は主として此方面から試みられてゐる。

以上の如き考へ方に於て時の變様は如何なる位置に現はれて来るか。cogito は如何なる變様に於ても同一的である故に時の變様は cogito の本質に屬するものではない、従つて作用の本質を示すノエシスの側に現はれるものでない。また作用の志向する不變の意味對象そのものも超越的實在定立を離れて常に意味の同一性を維持する限りそれにも現はれる筈がない。それ故時の變様は意識に於けるノエマの現象の仕方 (Wie, Weise) 又は所與の仕方の上に現はれて来る特色でなければならぬ。「何ものかの意識」と云ふ意味 (Weisen des Bewusstseins im Sinne noetischer Momente) に於て示されるのでなく、如何にノエマの全體的具體性 (volle Konkrektion) が現はれて来るかと云ふ意味 (Weisen, in denen das Bewusste selbst und als solches sich gibt) に示されるのである (Ideen S99)。更に云へば作用の具體的直觀的内容と意味對象とが如何なる程度まで一致するかと云ふ點従つて夫れ自身では實在定立を離れた純粹意味對象がどの程度迄作用の中に顯現的存在性を擔ひ來るかと云ふ點に示されるのである。意味の顯現の仕方を作用の性質の移行に應じて若し stufenmässig に見る事が出來ると

すれば(例へば *wahrnehmungsmässig, erinnerungsmässig* etc.)、それは十全的に顯現したものを
 フンダメントとし他をその變様として見る事が出来るであらう。時の變様は實
 に對象的意味の持つ規定(特性)に屬する知覺的顯現性をフンダメントとして、同一の
 志向性を辿りつゝ發展するものに外ならない。知覺的顯現は現在の原始的であり、
 對象そのまゝの顯現であり、いつも無變樣的な原始印象を含む。所謂對象の顯現的
 存在に對する確信もこれに伴ふ。然し上述せる如く此知覺的なものが現在意識の
 焦點から背景の方へ沈んで記憶に維持されてゐる時、その再現はたとへ意識の中
 心に置かれても *erinnerungsmässig* となり「過去」と云ふ對象的性質 (*noematischer Charakter*) を
 擔ふ様になる。同時に吾々は期待するものに對して「未來」と呼ぶ志向性を意識する
 ことは已に述べた如くであり、これ等が反省の立場に於て意識流を連続的に充實す
 るものと見られる時現象學的時間が成り立つのである。

それでフツサールに由れば現在過去未來の時の變様の成り立つのはノエマの層
 に於ける對象的意味の現はれ方に即してある。此の對應するノエシスの側に於
 て時の現れ方 (*temporale Gegebenheitsweise*) に双關する作用は、論理研究に於て *nominal set-*
zander Akt と呼ばれ (*Log. Unters. II. § 38-§ 39*) 且對象的意味充實の可能を含む直觀作用

として見られた知覺と想起と期待の三者であり、想像作用の如きはそれに對應するノエマに於ての現實的時間意識を持つこと不可能と考へられる。何となればそれは非定立的であり定立の確信 (Urdogma) の如きも中和されてしまふからである。勿論想像のノエマに於ても他の想像的時間の如きものが考へられるかも知らぬが、それは本質的に別のものでなく、云はゞ現實的時間意識に平行し、その中和に由つて成り立つものと見られるであらう。

要するにフツサールに由れば時間意識は其位置に於てはノエマの側に於て、恰かも作用の本質の中樞をなす純粹我とそれの志向するノエマの中核たる意味對象との双關的結合點に位し、志向性としてはノエマの意識の最深のフンダメントをなしてゐる様に解釋される。明らかにフツサールに於ては時の變様は作用の本質的方向に現はれるのでなく、若し作用的志向性の特色が全體的意識流の横斷面に展開するもの、彼のブレンタノの表象、判断、情意の區別の如きも此展開に見出されるものとするればまさしく意識流の横斷面を結合してゆく縦の方向に示されるものでなければならぬ。従つて其志向性も、對象を意識する作用の志向性とは嚴密に双關しながらも別異の側面に屬するものとならねばならぬ。ブレンタノは此志向性の別異

性を見なかつたであらう、それ故表象作用の本質的區別に時の様態が屬すると考へたであらう、勿論フッサールに於ても時間意識の成立する爲には知覺想起期待と云ふ如き直觀的表象が重要な意味を持つのであるが、然し此重要さは雙關的關係として認識せらるべきものである。若し對象的なるものへの雙關々係を離れ單なる作用として表象を見れば、對象を志向する一次の意識であることは明かにせられても、それに知覺想起と云ふ如き區別の如何にして現はるゝかを示し得る何等の手がゝりも見出さないであらう。何となれば知覺と想起の區別は表象内容に關してのみ判明になるべきものであるからである。吾々が知覺と記憶を區別する時は已に現在と過去と云ふ如き時の區別を豫想してゐる。フッサールが時の變様を作用的側面に求めずに對象的側面に求めたのは十分の意味あることゝ認めねばならぬ。かくして自分が尋ねて來た時の志向性の問題はフッサールの對象的意味の擔ふ志向性に求めることに由つて一先づ定まつた歸結に達し得た様に思はれるのである。

八

フッサールに由れば現象學的時間とは一方には具體的全要素としての「充實」の度

を含み、他方にはそれに雙關して發展する對象的意味の特性を含めて見たる體驗、即ち全ノエシスの全ノエマに對する關係を、相互に結合してゆく形式であり、従つて意識と意識を綜合する、或は一の意識から他の意識への移りゆきを統一する高次の意識の形式である。此高次の意識に對應するノエマは常にその項と云ふべき下位の意識のノエマから fundieren されてゐる (Vgl. Ideen, § 129, § 118)。か様に高次的なものが基礎的なものから fundieren されると云ふことは、現象學的時間に於て如何なる意味を持つてあらうか。

フツサールに由れば意識のフンダメントとなるものは表象であり、表象は常に對象を意識に表現することに由つて、意識に對象的關係を與へて客觀化する。即ち對象を表象すると云へばそれに由つて意識そのものを客觀化することになる。ブレントノがすべての精神作用は表象であるか或はそれをフンダメントにするものであると云つた意味を解してフツサールは如何なる志向的體驗も客觀化的作用であるか或はそれに基づくものであると云ふ (Log. Unters. II, § 41)。其意は表象の全質料が如何なる場合にもその與かる作用の全質料を構成し、この質料を Grundlage とし、て作用より對象への關係がなり立ち、従つて作用の内容が客觀化されるに到るから

である。表象が質料を與へなければ如何なる體驗も對象を志向することが出來ず、從つて意識は客觀化せられない。か様に表象の意味を考へれば時の意識に含まるゝノエマを fundieren するものは客觀化的表象の含む質料に外ならない。

かくの如き質料をその「充實」に於て見る時に原始印象の如きものとなるであらう。フッサールの論理研究に由れば質料は少くとも二つの意味に用ひられて居る。第一は作用の性質と結合して志向的本質を構成する作用質料の意味、これは七に述べた如く實有的と見らるべきに係らず非實有的な意味をも擔つてゐる。第二は範疇的形式即ち高次の對象を構成する Fundament として與かる Stoff であつて、これは何處までも感性的直觀的なものと考へられてゐる (Log. Unters. II, § 42)。前者の意味は「Ideen」に於ては特に非實有的な側が重視されて全然ノエマの側に入り、對象的性質 (noematische Charaktere) の核となる具體的意味となり、他の實有的な、それ自身としては全然志向性を有しないと云ふ側は却つて後者の意味の質料に入つて質料的與件 (hyletische Daten) の如きものとなるであらう。現象學的時間が最下層に含む質料とは後者の意味に考へられた感性的所與に外ならぬであらう。か様な質料に即して與へられる Singebung に由つて fundieren せられたる一の範疇的形式として現象學的時間

を見ることも出来る。

然し時の意識のフンダメントをなすものは如何なる場合にも客觀化的表象の質料と云ふべき感性的原始印象に求むべきものであらうか。勿論時の形式を高次の對象に屬するものとして見れば高次的なる所以の特性をフンダメントより引き出すことの出来ないのは云ふ迄もないが、それが直觀されるためには先づ以て感性的質料の所與に基づけられねばならぬと云ふことを、他の高次的なるものと同様に時の意識についても要求すべきものであらうか。フツサールの現象學が他面には本質學の一とし、マイノングの對象論など、同一の立場を含む限り、本質構造を説くに當つて上の如く考へるのは當然でもあらうが、若しも時の意識を純粹我より具體的に見ると云ふ先驗的還元を徹底せんとするならば、今少しく内面的に考ふべきではなからうか。例へば不完全ながらも二に述べた如く現在より過去へ直線的に流るゝ時の形式の他に、現在から却て未來へ或は現在の中心より出で再び現在の中心へ流れ入る時の形式を考へるならば、それは單に感性的質料に基けらるゝものとは見られないと思ふ。眞に具體的な時の意識のフンダメントには感性的質料から導き出すことの出来ないそれ自身のものであるとは考へられぬであらうか。

フッサールが現象學的方法として用ひる内部反省の對象とするものは眞に具體的に動きつゝある作用ではなくて、已に本質分析のために何等かの意味で對象化された作用である。かく云へばとて自分は直ちにナトルプが分析記述は已に客觀化的方法の一步であると云つた批評に従はんとするではない。吾々の直觀が次第に深く進む時所謂直觀的分別の如きものが精より精に進むは明かであり、現象學的分別とはこの分別に基くものと思はれるが、然し本質分析のために特に直觀しようと思ふ時、直觀の具體性は必然的抽象を受け、諦視されるものは作用の志向的本質及その雙關する對象の意味であつて、それ自身として永遠のエイドスを宿するため、現實の具體的個性的關心からはなれた可能的意識とならざるを得ない。單に方法上の問題でなく取扱はるゝ事實性そのものが對象化を免がれないのである。其點で現象學の見方が本質分析の立場に留まる限り、數學者が數の本質を直觀し或は對象論に於て色の本質を分析すると同一であらう。對象化されたものを諦視すると云ふ點では内部知覺と外部知覺の間にも根本的の差異は見られない、唯二者のノエマの側に於ける内容顯現の仕方に *Absehung* があるとかないとか云ふ差異を持つのみである。フッサールがブレンタノの内部知覺説を批評して、内部知覺の確證と

云ふものは外部知覺に於ける感性的所與の存在に關しても適合すると主張し、また "Ideon" に於て内部反省の前に無反省的な體驗が已に存在し反省はこれに何等の本質的變更を加へるのでないと思ふ點に就て見ても、現象學的反省の對象となる作用は已に對象化されたものを考へてゐることを察し得られると思ふ。

然し吾々は如何にしても對象化して見ることの出来ないものを更に意識することは出来ないであらうか。反省作用そのものを意識することが出来ないであらうか。西田博士の云はるゝ如く對象の意識の他に作用の意識が可能であるとすれば、それこそ對象化して見ることの出来ないものゝ意識であらう。作用とは意識することである故作用の意識とは眞に作用が作用すること即ち純粹作用となることであらう。單なる作用は對象への作用であるが純粹作用は作用への作用となる。此立場より見れば、所謂客觀化的表象及それに基づく高次の作用と云ふものも單なる作用であつて、その限り對象に向ふものであり、對象的要素の所與に基づけるゝものに過ぎない。然しながら純粹作用の一々の働きは作用と作用の内面的結合であつて、其結合の一々は主觀的反省的評價を含む。此反省的又は主觀的なものゝフンダメントとなるものを客觀化的表象の感性的質料より導くことは如何にしても不

可能である。フッサールの所謂客觀化的表象及それに基づく作用と其雙關體は已に知識化されたものであり、知識化されたものに於ては對象的直觀に達してはじめて志向した意味を自らの中に含み自らに顯現出來ると考へられるに由り、知覺のフンダメントたる感性的直觀を最下の層とすることが出來るであらう。然し純粹作用の立場に於ては感性的直觀も單なる一作用に過ぎない。感性的直觀をフンダメントとして成立する高次の直觀も同様であり、それ自身に顯現すると見らるゝ客觀的なものも純粹作用の内容としては主觀化せらるべき一材料に過ぎない。主觀化的とは客觀的なものから退くのではなくて却てこれを自らの中に包含し、全體の意味を作用と作用の結合に於ける主觀的評價の意味に還元して見ることである。即ち純粹作用は主觀へ還ることに由つて却て單なる客觀化的作用を超越することが出来る。かくの如き主觀的超越性と云ふべきものゝフンダメントはフッサールの表象質料に求むべきものではなくて、その最後に於て表現せられる全體的主觀性に求めねばならないと思ふ。即ち純粹作用の立場に於てはその最後に於てのみ現はれる全體的主觀性に於て一々が綜合され、一あつて二なき個性的なものを形成するのである。か様に作用と作用とを内面的意味にしたがつて結びゆく場面に於ても、

恰かも彼の對象的意識の推移が質料的なものを *Grundlage* として成り立つことに對應し純粹作用を相互に結合する作用的質料の如きものが考へられねばならない。それは勿論感性的質料とは別異のものである。作用的質料とは純粹作用のフンダメントとなるもの、如何にしても對象化するとの出來ないものに屬してしかも個性的表現を形成し得るもの、客觀的内容に對立するものでなく却つてこれを包含して主觀化し得るものでなければならぬ。具體的人格を構成する質料はかくの如きものであらう、さればこれを客觀化的表象質料から區別して人格的質料と呼ぶことも出來るであらう。

現象學的時間が已に述べたる如くにして成立するに對し、此處にも純粹作用の質料をフンダメントとし、一々を結合する形式としての具體的時間が成り立つ筈である。それは最後に表現する全體的主觀性其もの、自己形成に向つて働いてゆく。全體的自己形成の動きこそ純粹作用の「本質」である故にそれは作用自身の中心にかへりゆく運動とも考へられる。自らより出で自らへ還る純粹作用に於て、形成すべきものが若し未來にあると云ふならば、それは現在より不斷に未來に流れる方向であると共に、若し形成せられるものが形成するものであると云ふならば常に未來に

あるものから流れ來る方向とも考へられる。更に作用と作用とを結合するものが結合自身の Grundlageとして一々の作用を超越するとすれば、却つて留まるものとして作用の無を自らに宿すと見らるれば、かゝる具體的時の方向は無より出で無にかへるとも考へられるであらう。

以上の如く、現在から過去へ向つて直線的に方向する現象學的時間と、未來より出て未來へかへる或は現在の無より出て無へかへると云ふ如き純粹作用の時間と如何に關係するか、過去又は未來の意味が如何に異なり如何に關係するか。これを明かにするのは更に根本的問題の前に立つことであり唯今の自分としては容易に爲し能はざる處である。(完)